# 景観フォーラム

# 巻頭言

2022 年謹賀新年。新型コロナが中国武漢で発生しほぼ 2 年が経過しました。即ち、人類はこの感染症と戦い始めて 3 年目になろうとしておりますが、未だ勝利の勝鬨を上げるに至っておりません。人類規模の感染症との戦いと言えば、第一次世界大戦を終結せしめた 100 年以上前のスペイン風邪のこととなりますが、今、私たちは 100 年に一度という世紀の大事件と遭遇していることになります。この度の感染症は世界規模で 530 万人ほどの死者を出し、日本でも 2 万人弱となり、それがまだ続いております。第二次世界大戦が 5000 万人~8000 万人以上の死者を出したことを思うと、この数字は驚くべき数字であり、少なくとも第二次世界大戦時死者数の約一割に匹敵するということになります。

そのような状況下で、アメリカ合衆国は"民主主義サミット"を開催いたしました。複数政党による選挙を実施している 109 の国家と 2 地域(台湾と欧州連合)の民主主義国を名指しして、「国内の民主主義を刷新し、海外の独裁国家に立ち向かうため」としてアメリカが議長としてWeb会議となりましたが、世界の半数の国が招聘されなかったというのも何だか変な気がいたします。当然、北朝鮮、ロシア、中国、イランなどの国々はこの会議には排除されたことになります。面白いことにこの排除された中国などは自国の正当な選挙を通して健全な民主主義を実行しており、米国などの腐敗選挙などよりもずっとましだと述べております。しかし、残念ながらそれらの国においてフランス革命で宣言された民主主義の根本概念である自由、平等、友愛が実行されているとは思えません。資本主義を乗り超え社会主義革命で平等を勝ち取ったとはいいながら、自由がないのではどうしようもありません。もしかしたら、自由がない平等というものをどのように作り出せたのか不思議でなりません。

さて、北朝鮮という国に行った人の話を聞きますと、街並みが整然として雑然とした看板などなく非常に整った景観を呈している国だと聞いたことがあります。恐らく命令一下ですべてが決まる社会構造が齎す景観は余計なものがなくすっきりとした景観を呈しているかもしれません。しかし、そこには自由と友愛がないある種の冷たさが表れているのではないかと想像いたします。専制主義国家の景観はどういうものであるか皆さんと大いに議論してみたいものです。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 斉藤全彦

### く日本景観フォーラム 2021 年度年間ケジュール>

\*2021 年度とは 2021 年 4 月 1 日⇒2022 年 3 月 31 日のことです。

### 2021年

4月20日(火) 於ネット会議 第1回景観研究会(コロナ禍の景観1)

5月25日(火) 於ネット会議 第2回景観研究会(コロナ禍の景観2)

6月 29日 (火) 於ネット会議 第 3回景観研究会 (コロナ禍の景観 3) 第 1 回理事会

7月27日(水) **於ネット会議 第4回景観研究会** (コロナ禍の景観 4)

8月31日(火) 於ネット会議 第5回景観研究会 (コロナ禍の景観5)

9月27日(月) 於ネット会議 第6回景観研究会 (コロナ禍の景観6)

10月23日(土) 第1回景観まちあるき(等々力渓谷)

11月27日(土) 第2回景観まちあるき(江戸東京たてもの園)

12月18日(土) 第3回景観まちあるき (大磯町・忘年会)

12月 21日(火)**於ネット会議 第 7 回景観研究会**(コロナ禍の景観 7)

### 2022年

- 1月22日(土)第4回景観まちあるき(明治神宮界隈)
- 2月22日(火)於ネット会議 第8回景観研究会(コロナ禍の景観8)第2回理事会
- 3月26日(土) 第5回景観まちあるき (野田市)
- ■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

# 等々力渓谷~田園調布まちある記

### 野田路人

コロナ禍の中、ワクチン接種を終え、感染者も減りだしたので、初夏の5月に予定し延び延びになった「等々 力渓谷〜田園調布まちあるき」を10月23日に実施しました。

5ヶ月ぶりのまちあるきは天気にも恵まれ、初秋の武蔵野台地-国分寺・玉川崖線-を歩き、自然・文化・歴史・と街並みを見る事を念頭に等々力駅に集合、①等々力渓谷、②丸子川(旧六郷用水)、③尾山台の町並みと伝乗寺、多摩川の河川敷で昼食を取り、④多摩川台公園、⑤多摩川浅間神社、⑥六郷用水、⑦せせらぎ公園、⑧田園調布駅周辺と坂道や階段を上がったり、下ったりしながら順に見て歩き、駅前で解散と盛りだくさんのまちあるきとなりました。

### く① 等々力渓谷>

等々力渓谷は23区内唯一の渓谷で、四季折々の魅力があり、渓谷に足を踏み入れると木立ちの中にせせらぎの音や鳥のさえずりを聞き、別世界が広がります。東急大井町線等々力駅より徒歩3分の等々力渓谷入口のゴルフ橋のたもとから階段を降り、多摩川に向かう谷沢川の流れに沿って自然散策路が整備されています。渓谷沿いに歩くと、木立の中の「等々力不動尊」「不動の滝」「三号横穴」「日本庭園・書院」などが見学できます。









### く結城の歴史>

結等々力渓谷に隣接して階段を登ると不動尊があり、渓谷からの登り口には23区内では貴重な自然湧水による滝、階段の途中には茶屋や休憩処もあり、斜面一体で豊かな動植物が見られます

本尊は不動明王で、寺に残る言い伝えによれば不動像は1300年前の作で、そして800年前に 興教大師が夢を見て、武蔵国に不動明王像を安置する場所を探し続け、当時の豊富な水量を流す当地の滝を見て、霊地と悟り、この地に不動堂を創建したのが始まりであると言われています。本堂は江戸時代末期の建築で、拝殿は1952年に山門は1968年に満願寺より移築したものとのこと。



### <不動の瀧>

等々力不動尊発祥のもととなった不動の瀧。龍の口から湧水が流れ落ちている。湧水が途絶えることは無いそうですが、絹の糸ほどの水量、四季に枯れることのないこの瀧をお瀧と呼んで一心不乱に修行する人は今も多いとのこと。

等々力の地名は一説瀧の轟く音に由来すると言い瀧「轟山」という山号にもなっている。

他の一説は満願寺が深 沢免々呂城内におり免々 呂城(とどろき)の満願 寺と呼ばれ現在地に移転 後もとどろきの満願寺と 言った事から地名になっ たという。





### <横穴古墳>

渓谷の左岸崖面に、古墳時代末期から奈良時代にかけて構築された横穴墓が6基以上発見され、昭和48年に発見された3号横穴は、典型的な横穴墓の形態を留め、奥行きが13メートルで、内部はとっくりを半分に割ったような形をしています。埋葬人骨や副埋葬品も良好であったことから保存措置が講じられ東京都指定史跡になっています。本横穴群の被葬者たちは、いずれも副葬品が豊富なことから、後の武蔵国荏原群の等々力周辺を治めていた有力者であると推定されています。



### <日本庭園・書院>

等々力渓谷谷沢川の下流部、等々 力不動尊の対岸に、昭和36年に建築 された書院建物とそれをとりまく 池、流れ、竹林、石畳の階段園路な どで作られた日本庭園があります。





### <②丸子川>

丸子川(次大夫堀)は現在に残る六郷用水の一部で国 分寺崖線に沿って崖下を流下していきます。東急大井町 線、駒沢通り、第三京浜国道と交差したあと善養密寺の 前を通って、矢沢川と合流します。矢沢川から下流は、 八幡神社、照善寺の前を通って亀甲山(多摩川台公園) に至ります。浅間神社の脇に水門があって、そこから多 摩川に放流され、丸子川の終端になります。



### <3 伝乗寺>

尾山台の住宅地にあるこの寺は、創建年代は不明で、住誉良公和尚によって開山され、多摩川対岸の神奈川県川崎市中原区の泉沢寺の末寺として創建された。1802年(享和2年)にさいの神の火が、燃え移って伽藍を焼失したがその後再建された、境内には都内でも珍しい 2005年の建立された木造の五重塔もあります。





### <④多摩川台公園>

東急線多摩川駅から徒歩 1 分ほど、多摩川沿いの田園調布から続く高台に、西北から南東に細長く武蔵野の面影が残る緑の深い公園で、多摩川と対岸の景色の眺めが良い。公園全体に古墳(前方後円墳の亀甲山古墳等)が点在し、設置された古墳展示室では、古墳についての説明が行われ、埴輪などが展示されています。園内には水生植物園やアジサイ園などもあます。





### <5多摩川浅間神社>

八百年前の創建と伝えられます。社務所の屋上からは、多摩川が 望め、高台にある境内の見晴台より川崎方面から多摩川上流方面ま でが眺める事が出来ます。







### <⑥六郷用水:女堀と南北引分~大田区内を流れる六郷用水(再現水路)>

大田区ではかつての六郷用水の流路跡に再現水路を作り、往時の六郷用水の面影をいまに伝えています。水路の規模は小さいですが、錦鯉が泳ぐ水辺の散策路として整備し、在りし日の六郷用水の面影を偲ぶことができます。また、用水跡の多くの場所に説明看板や標識を整備して、どこを六郷用水が流れていたのかが容易に分かるようにしています。

### <⑦せせらぎ公園>

かつての多摩川園遊園地で、その後民間のテニスクラブであった土地を整備した水と緑に囲まれた豊かな自然を感じることのできる公園です。 園内には大きな湧水池が2か所あり、様々な水生生物が生息しています。春にはサクラ、ヤエザクラなどが楽しめ、秋にはイロハモミジの紅葉を楽しむことができます。また3か所の多目的広場があり、園内に区民の地域活動及び文化活動の促進や地域力の向上、やすらぎと地域活動の場の充実~をコンセプトに、令和3年1月16日に開館した隈研吾氏設計の「せせらぎ館」でコーヒータイムとしました。



### <8田園調布>

田園調布は、1918年(大正7年)に実業家渋沢栄一らによって立ち上げられた『理想的な住宅地「田園都市」の開発』を目的とする田園都市株式会社により主に開発され、1923年(大正12年)8月から分譲された地域で、現在の大田区田園調布の大部分の地域が第一種低層住居専用地域と第2種風致地区で、日本有数の高級住宅街です。



### <田園調布駅>

東西方向に傾斜があるため、東側の街区は改札口と同じ高さですが、 西側の街区はおよそ建物 1 階分高くなっています。西側に面した洋館風 の旧駅舎は東横線複々線化事業の一環としての田園調布 - 多摩川間改良 工事に伴い 1990 年(平成 2 年)9 月 4 日に使用停止となり解体され



ましたが、改良工事が完成した 2000年(平成12年)1月15 日に復元されました。復元後は 駅舎としての機能は持っていま せんが、入口の裏側にエレベー ター乗り場があります。





### <今回のまちあるきで>

木々の中の渓谷や公園、川のせせらぎなど間近かの「緑」「水」は安らぎを覚え、景観へ与える大事な要素であり、その価値を改めて実感しながらのまちあるきとなりました。

# 犬山市に「観光旅行」(下) 「明治村」で宝さがし

豊村泰彦

愛知県犬山市にある博物館明治村は明治時代に建てられた洋風建築物を移築復元して博覧する一大テーマパークである。犬山市観光2日目は、名鉄犬山駅から20分かけてこの明治村にやってきた。広さは100万平方メートルで東京ディズニーランドの約2倍、テーマパークの規模としては日本で3番目になるらしい。公開されている建物は蒸気機関車や路面電車などの車両を含めた67件で、そのうち12件が国の重要文化財に指定されている。これだけ広いところを1日で回るには時間が足りなくなるだろうと思い、朝の開場と同時に入場したが、やはり全部は回り切れなかった。



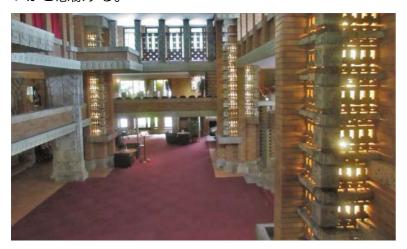
### ■擬洋風?擬東洋風?

世界のすべての街の景観を形成しているのは建築物と道路である。特に建築物が景観に与える影響は大きく、それが地域の魅力になっている場合が少なくない。そのような地域の魅力になり、個性となっていた建築物が日本では明治時代に数多く造られた。それもそれまでの日本の伝統的なそれとは異なった和と洋が融合したような擬洋風という独特の建築物である。

日本では木造建築が主流なのに対して外国の建築は煉瓦造や石造のものが多い。明治時代に日本人は外国式に憧れそれが文明開化となった。できるだけ外国文化を取り入れるために、公共物を外国様式に変えようとしたのである。かといってそれまで和式で育った日本人に今から外国式で生活しなさいと強いても無理である。外観は洋風にしましょう。でもトイレや風呂場、室内には玄関で靴を脱いで上がる構造でいきましょう。それが擬洋風建築の特徴である。



明治村で最も人気があるのは、アメリカ人建築家、フランク・ロイド・ライトが設計した「旧帝国ホテル中央玄関」である。以前写真などで見た時には全体的に洋風な建物とは違った印象を持っていたが、実際に見るとさらにイメージが違っていた。特に目立ったのが、建物全体を覆っている幾何学的な彫刻を施した大谷石やテラコッタの装飾で、それらがその建物を洋風建築とか高級ホテル風とかの既成概念を打ち壊しているように感じた。さらにロビー内部を見ると彫刻された壁や照明器具からの灯りが室内を柔らくつつみ異国的な家具も一体となって独特の世界観を創り出している。そこには和の感性は微塵もない。かといって洋風建築とも擬洋風建築も異なる。それらは東南アジアの寺院を連想させ、敢えて言うならば擬東洋風建築といってよいかもしれない。ライトは設計を依頼されたとき、西洋建築にするよりむしろアジアの古代建築のような建物にしようと考えたのではないかと想像する。



### ■監獄の構造

村内 67 件という膨大な数の建物ではあるが、それぞれ歴史的にも建築学的にも貴重な資料であり、詳細にみていくのは大変である。できるだけ対象を絞ってみた中で、より興味を感じたと同時に物足りなさを感じる建物があった。それが金沢監獄中央看守所・監房である。この建物は、木造桟瓦葺の洋風建築で、八角形の中央看守所を中心に左右から奥に 5 つの監房が放射状に配されている。復元されているのは、中央看守所と監房は一部だが、我々の日常とはかけ離れた世界であることは感じ取れる。

とくに興味深いのは放射状の監房である。現在、 刑務所などの拘留施設には中心から放射状に監房が 配置されるものと、ホテルの部屋のように廊下を挟 んで監房が並列型に配置されるものがある。日本で 放射状型監獄が造られたのは明治からで、イギリス 植民地時代のシンガポールに建てられた刑務所を見 た明治政府の高官がこのシステムを日本の新たな監 獄建設に取り入れたのが始まりだ。このタイプは監 視効率が良ことが最大の利点であるが、位置によっ て格差があり、不平等が生まれるというデメリット もある。しかし、放射型を取り入れているところの 多くはスタンダードな監獄の形となっている。



私がこの放射状型の監獄を最初に見たのは北海道の網走にある博物館網走監獄である。この施設は、明治時代に網走湖近くに建設された網走刑務所の建物を保存公開する博物館で敷地面積は約東京ドーム 3.5 個分あるという。それを視察したときの感動が蘇る。こうした刑務所や拘置所のような施設は全体の構造が複雑で、部分的な復元では物足りなさを感じる。全体を観るならばやはり網走に行くしかない。

監獄については明治村にもう一例、前橋監獄もがあるが、雑居房の一部が復元されたものだ。この監獄には本来十字放射型監房というきわめて興味あるシステムが配置されていたのだが、そっちのほうの復元が観たかった。



### ■明治の鉄道

鉄道好きとしては、明治村の目玉である蒸気機関車と京都市電に乗ることも目的の一つだった。残念ながらこの日は京都市電が運休。蒸気機関車のほうには乗ることができた。

蒸気機関車は、明治村の敷地内に建てられた「とうきゃう」駅から「なごや」駅まの一駅区間を往復している。今回乗車したのは、アメリカ製の蒸気機関車9号。蒸気機関車は石炭を火室にくべて火を燃やし、沸かしたタンクの水から生まれる水蒸気エネルギーで動輪を回して進む乗り物。蒸気の力で機関車が客車を引っ張るところに電気鉄道やディーゼル機関車とは違う独特な乗り心地がある。しかも、今回乗車したのは100年以上に製造された客車であり、座席から手摺。窓枠にいたるまで周囲は完全に明治の時代に囲まれたため、気持ちよくタイムスリップ感を味わえたことは幸せであった。

取り壊されてゆく古い建物に対して、惜しむ気持ち、これをノスタルジーと呼ぶのであろう。しかし、歴史のある建物にはそれぞれ人を魅了する価値がある。明治村の敷地は 100 万平方あり、湖に面し、森に囲まれている。古城や寺院が似合う場所だ。しかし明治村が展示する建築物は森の中というより元々は都市にあった建物である。都市にあってこそ美しい建物の周りが野原だったり、森のような場所におかれても、現実感がなくなってしまう。森が背景でも展示物だからよいと言えばそれまでだが、違和感は感じる。むしろ現代の建築物の中に建っているほうがその美しさや特徴を際立たせるのではなかろうか。

蒸気機関車(SL)が一駅区間の短い中でも煙を吐き出しながら活動している姿は生き生きとして美しい。生きて人の役に立っている姿以上に美しいものはない。一方、公園で展示物になっているSLは単なる「像」であり、金属の塊でしかない。死んでいるSLに感動する人は少ないと思う。



### ■明治の力

明治村の中でSLと同じように人に利用されている建物はあるが、アクティビティや売店や飲食店などはほんの一部である。一般に利用を許したら現物が劣化して保存できなくなるという考えもあるが、野外に晒し、接触やむを得ないとしている時点で劣化もやむなしとしているのだろう。ならば積極的に活用するほうが建物にとってもよいと考える。

明治村に来た旅行者が、展示の建物を気に入り、一晩くらい泊まってみたいなと思ってみたとき、「宿泊 OK」とか「短期の賃貸可」ということになったら。別荘でも見つけたような気持ちになって、楽しくなるのではないか。明治村の場合は建物だけで 60 軒くらいあるので、一軒一軒現役の建物に戻したら、各地にあるテーマパークやアウトレットに負けない魅力的な場所になると思う。それが、明治という時代の価値を現代に生かすことになるのではないか。このような妄想を抱かせるのは、それだけ明治という時代には何か計り知れないエネルギーを時代として持っているということなのだろう。文明が開化した明治の底力を見せるのはやはり眠った明治ではなく生きて働く明治である。今後明治村がそういう「場所」に少しでも近づくことを期待したい。



# 江戸東京たてもの園 まちある記

### 丹羽譲治

11月27日、今回のまちあるきは、江戸東京たてもの園でした。 園内は西ゾーン、センターゾーンと東ゾーンの3つのゾーンで構成されていて、センターゾーンから探訪しました。

まず、髙橋是清邸を訪れました。1902年に建設され、1936年の 2・26 事件の現場となったと資料にありました。柱梁は太く、逆にガラス障子は繊細な表情をみせていましたが、耐震補強の太い格子が目立ち、雰囲気を壊していたのは残念でした。

伊達家の門は、旧宇和島藩伊達家が大正期に建設した表門で した。門の屋根が反りで番所が陸り屋根でした。

東ゾーンに入ると皇居正門石橋飾電燈の脇を通り、明治時代後期とされる万世橋交番に至りました。執務室に2畳の宿直室、後方にトイレを備えています。コンパクトながら執務室と宿直室の仕切りがガラス障子であることが空間に広がりを持たせていました。

都電 750 形の展示近くに、藤森照信館長が設計・制作指導した復元縄文住居が展示されてました。多くの縄文時代の住居が茅葺ですが、ここでは樹皮で葺き、その上に土で葺き、芝を貼っていて、この方が現実味を帯びていると感じました。(復元住居の建設手順は、江戸東京たてもの園のサイトで、詳細に紹介)



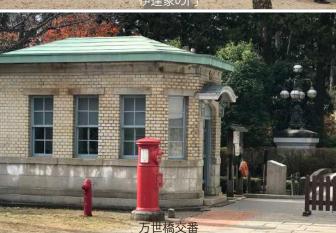




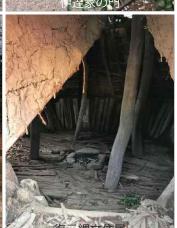












!!

武居三省堂、花市生花店丸二商店、と昭和期の看板建築が並びます。かつて渋谷の道玄坂にも数軒残ってましたが、現在では普通のビルに変わっています。12 時を過ぎたので、うどん屋を覗くと満員で13 時に戻ろる事にしました。

和傘問屋の川野商店、建物右手に倉のある小寺醤油店を覗き、 トイレが別棟になっている万徳旅館に寄りました。なんでもないデザインの照明が綺麗でした。

仕立屋は水回りのない小さな2階建ての建物ですが、2階の軒に太い桁が見られます。室内もしっかりした造りで、贅沢な(派手ではなく豊かな)印象を受けました。

鍵屋は、真ん中に店主の席があり、それを囲むようにカウンターがある居酒屋です。左手に6畳の座敷もあり、献立やポスター、ホローの看板と調度品を見ると、賑わいが伝わってくる佇まいでした。

名主の天明屋は番屋と 8 畳間のある長屋門が迎えてくれます。 大学の先輩の親戚にあたるそうです。当主が移築に理解を示し実現したそうです。大きな茅葺の屋根は単純な寄棟でなく、正面に破風をもつ珍しい屋根でした。裏に回ると瓦葺の屋根の部分もあり、複雑な形状をしていて切妻と寄棟が交差する箇所は、大きな樋で雨水を処理していました。屋根を見るだけでも楽しい。中に入ると、広い土間が2つに仕切られ、手前がパブリック、奥がプライベート空間としていました。仕切った壁に農家には珍しい火灯窓がパブリック空間としての演出として設られていました。平面図を見ると土間の次が広間そして玄関の間があり、賓客を迎えるのは土間ではなく庭から直接迎入れると想像されました。帳台をへて最奥に書院の間があり繊細な建具に目を奪われました。小学生の頃、夏休みによく訪れた父の実家は、太い大黒柱と梁が印象的な造でしたが、同じも名主でも、格段の違いでした。



















!!

見終わってうどん屋の戻るも一杯で、西ゾーンの飲食店ラランデ 邸で昼食をとりました。

前川國男邸は、前川國男の自邸で戦時中の 1942 年に建てられた。前川國男は、大学卒業後、コルビュジェに師事し、帰国後、レーモンド事務所を経て独立し、

多くの公共建築を残した。あの丹下健三も前川國男の事務所に一時在籍したことがある。外観は切妻で潔い。玄関に入り、女中部屋、トイレ、書斎と続き、大きな扉を介して吹き抜けの居間となる。偏心した軸つりの扉も高い空間に似つかわしい。一緒に行ったメンバーもデザインが古びていないことや住みたいとの意見もありました。天井までの窓、2面採光、2階への緩やかな階段と気持ちが良いと感じさせる要素が豊富なリビング・ダイニングでした。以前来た時は2階に上がれたように思います。2階は確か所員の製図するスペースと記憶しています。居間の向こうは台所、風呂の水回りと寝室で居間を中心に線対象の明快なプランとなっています。

エントランス広場で呼び止られ風呂敷を頂き、ビジターセンターの展示室の特別展「縄文 2021」ー縄文のくらしとたてもの一を閲覧した。縄文土器と一緒に私に出身地の桐生市千網谷戸遺跡土製耳飾りが展示してありました。繊細で美しいものでした。

園内には、江戸時代末期から昭和初期の建物を移築保存されており、広さも適当で、紅葉も美しく、興味深い建物も多く、土曜日で家族づれが目立ちました。新建材、集成材に囲まれていることに慣れてしまってる今、ここの建物は本当の木を使い、落ち着ける空間が体験できました。建物園を訪れた方々が、木に触れる生活が見直されることを願います。桜が咲く頃に、また訪れたいと思いま

















# **<LFJブックレヴュー 74>**

# 『広場の造形』 カミロ・ジッテ著 大石敏雄訳 1983 年年 3 月刊 鹿島出版会

斉藤全彦

この書の原題は『芸術的原理に即した都市計画』(1901 年刊行)というものである。即ち、著者カミロ・ジッテにとって都市計画というものは芸術無くしてはありえないということであり、都市計画そのものを総合的芸術作品と見なしている。美しくないものは都市と呼ぶに値しないし、美しい都市、精神というものを持った都市だけが都市と呼ぶに値する、ということになる。訳者が『広場の造形』という名称にしたのは、ジッテの都市計画が広場の造形を中心課題としてあり、美しい都市を創造するためには広場の造形なくしてはかなえられない、と考えたからであろう。

カミロ・ジッテは 1843 年建築家の息子としてウィーンに生まれた。彼は、建築家としての教育を受け、ウィーン工科大学に学び建築家、画家として活躍した。時代はまさに世紀末芸術の爛熟期にあたり、それはウィーンを中心に繰り広げられたのである。この 19 世紀後半のヨーロッパでは、著しい産業の発展に伴い、大掛かりな都市の拡張が行われる時代であった。

ジッテのまず念頭にあったものは「過去の広場や道、都市構成を研究し、それらの美しさの原因は何か」と問うことであった。また「昔の都市の美しさを理解した人にとって、外部の環境が人間の心に及ぼす強烈な影響力を認めないことはまず不可能であろう」という認識であった。アリストテレスを引用して「都市は人間に安らぎと幸福感を与えるように建設されていなければならない」とする。都市というものは公共建築や広場がなければその名に値するとは考えられないと言う。

この書の基本的スタンスは、公共建築と広場の関係性の現状とあるべき姿はどのようなものであるかを探求することである。広場の本質的条件とは空間がはっきりと限定され閉ざされていることである。例えば、古代ローマの広場は中央部が開いたままににしてある。そして、広場の大きさと建物の大きさがうまく釣り合っていなければならない。即ち、広場の最大の大きさが建物の高さの二倍を越えてはならない、とする。

現代(19世紀末から 20世紀初めのことではあるが)の状況に関して、ジッテは、果てしない直線道路の設計とか非の打ちどころのない規則的な広場の形成に対して警鐘を鳴らしている。それらは、何ら芸術的感情というものを持たず、ただ無目的で労力を浪費しているにすぎないとし、左右対称への傾向は流行病にまで広がっており、直線と直角は感受性を欠いた設計のしるしであると指摘する。まさに、これらは 21 世紀の現代でも通じることである。

都市計画に芸術的感性を第一と考えるジッテにとって、建物の質とそれが空間におかれた場合の価値は不可分の関係にあるので、美しい建物やモニュメントも正しくところを得ておかれなければならないとする。ほぼ百年前に、都市計画は芸術の尊厳をもってしかるべきだと考えていたジッテは「今日の都市計画家の芸術的モチーフは驚くほどみすぼらしいものになっている」と嘆いていたが、21世紀の現代の都市計画に則って成り立っている都市の現状を見て、どのような感想を漏らすだろうか。聴いてみたいものである。



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL: 03(3780)3814 FAX: 03(6379)6681

E-mail: info@keikan-forum.com

URL: https://www.keikan-forum.org

